

助ける？それとも見捨てて帰宅？

婚約者の王女よりも
魅力的な少年

ADULTS ONLY

R18

成人向け

処女喪失を
この目に焼き付ける

魔物野放しで
オナニー天国

救出後は無限SEX

魔王を倒して生きる意味を
見失った無気力勇者、
廃ダンジョンで

触手姦 されている

少年で **“目覚める”**

「今まで会った誰よりも……綺麗だ」

俺は元勇者。今は雑用傭兵として国仕えで働いている。

魔王を倒した功績として王女の婚約者になり、次期王としての地位もあるからそれなりの待遇で稼げてはいる。だが、なまじ人より体力がある分、体よくこき使われているというのも事実だ。

本音を言えば、

魔王を倒してから大きな目標もなくなって無気力だし、
婚約者の王女は美人だけど、いつもニコニコしてるだけのつまらない女で、

なんだか最近、生きている意味もわからなくなってきた……………。

元勇者が聞いて呆れる。少年たちが憧れる英雄など、成り果てればこんなものだ。

今日の任務も『廃ダンジョンの調査』といういまいち気が乗らないものだ。
魔王がいなくなった今でも各地に魔物の巣が残っている。その撤去や、迷い込んでいる民間人がいないかを確認する。いわば、魔王討伐の後始末といえる。

出発直前まで腕に擦りついて甘えてきた王女の笑顔を思い出して、憂鬱になる。
性欲も生まれつき薄いから、今さら王女や他の女に欲情などしない。食事も遊びも贅を尽くして、今は質素な生活でも満足だ。

これ以上、俺の人生を豊かにするものは、ない…………。

絶望の中、あてもなく暗闇を歩くのは、死に向かっていっているようで心地よかった。
ピチョン、ピチョンと水滴が地面を打つ。
そこに獣の鳴き声が混じったような気がして、立ち止まり耳を澄ます。
途切れ途切れに、高音すぎて聞き逃しそうになるが…………確かに生物の気配。
剣を構えて近付いていく。

物陰から、開けたその場所に視線をやった瞬間、どきりと俺の心臓が飛び跳ねた。

赤黒い触手型の魔物が、広場一帯に根を張ってうじゅるうじゅると蠢いている。

その中心に、半裸の少年が……………捕らえられて、いる。

ゴクリ。思わず唾を飲む。

その少年は衣服がひどく乱され、特に性感帯を舐め荒らされたとみえて胸部分と下半身だけ溶解液によって服が溶かされている。

露出した肌は粘液に濡れて、ギラギラ光る魔物の瞳に反射すると怪しく輝き…………。

俺は……………。

「ひやめ、てええ…………はなひ、てえ、んぶっ」

人語を理解しているのか、魔物は少年の抵抗に抗議するように太い触手を少年の唇にねじ込んだ。

まるで陰茎を咥えさせるかのように喉奥まで突いて、抵抗をなくしたところを口中ねぶって全身撫でて懐柔した。それが数分間、おぞましい粘液の音の中で続く。

ようやく解放された少年の口からは大量の蜜が零れていく。おそらく催淫効果のある魔物の体液だろう。もはや理性をなくした少年の蕩け顔に、俺は釘付けになった。

ふたたび触手が少年の肌を這いずり始める。もはや少年は気持ち良さそうにそれを受け容れるしかない。触手の先が割れて現れた小さな舌のようなものが、少年の尿道に入り込んでいく。

少年は悲鳴を上げるが、その唇は穏やかな笑みを湛えていた。

焦点の合わない瞳は、まるで夢を見ているかのように虚ろで、幸せそうだ。

「ああ、あ…………♡ あ、あ…………♡♡」

無数の舌が少年の唇に襲い掛かる。

少年は自ら舌を伸ばして口内に迎え入れた。おそらくそれらすべてを柔らかな舌で包み込んで、吸い上げて……チュポチュポと空洞内に響き渡る卑猥な音に、俺は身震いする。

そのうちに下半身を捕らえていた触手たちが少年の後孔に集まり始めた。

念入りに蜜を垂らして、グジュグジュと先端で塗り付けると……極細のそれが一本、勢いよく中をめがけて突き入れられた。

ツプンッ♡♡♡

「お、っ♡」

大きく仰け反った少年の細い喉が露わになる。

同時に腰を浮かしたので秘部も丸見えだ。後ろから両手首を拘束されたまま、好き勝手に胎内を暴かれていくその姿に、俺は息が荒くなるのを必死で堪える。

そして見た。己の股間を。ビンッビンに勃起していた。

こんなの数年ぶり……いや、人生史上最大サイズかもしれない。

過激になる少年の嬌声に、俺はすぐさまそちらへと視線を戻す。

「お〜〜〜〜っ♡♡♡ おお〜〜〜〜〜っ???♡♡♡♡♡♡」

細い数本で内壁をゴシゴシと磨きながら、さらにその秘所をつつくのは、見る限り触手の中でも最大の、極太で凶悪な“マラ触手”だ。

見たところ少年の服はまだ溶解液にすべて溶かされてはいない。捕まって間もないのだろう。つまり彼はまだ処女……貞操までは奪われていないとみた。

だがあんな太いものに貫かれてしまっちは、完全なる処女喪失……彼の男としての尊厳を奪う、卑劣な行為だ。度し難い。人間に仇なす魔物め。許してはおけない。

ギリギリと歯軋りをするも、両の足はまるで地面に縫い付けられたようにそこから動かない。グググッと力を込めて上体を揺すってもびくともしなかった。

勇者として。いやそれ以前に一人の人間として、あの少年を助け出さなければ。

しかしその使命感より強い命令が脳から出ている。自分本位の悦び。渴望。醜い性欲。それらを優先しろと。

「いやっ、やらあっ……………!!!」

脱力した身体を奮い立たせて、少年は必死に己の下半身を覗き込む。首を拘束する触手にめいっぱいかじりつくが、強かに頬を打たれて首を絞めつけられてしまう。

口に流し込むなどといった生易しいものではない。溺れている……………。

目の前で小さな子どもが命の危機に瀕しているというのに、それでも俺は動けなかった。

露出したままの陰茎をふたたび擦り上げる。犯されながら呼吸困難に陥る、絶望と快楽に歪んだその顔に、ハアハアとニヤケながら見入っている。

辺りに甘ったるい腐った香りが漂い、少年は「ぐうーーー」「あゝ あゝ ーーー」と弱々しい泣き声を上げながらも、触手のピストンを受け容れてしまっていた……。
幼い四肢は外側に引っ張られ、空中に張り付けられたような体勢で、何本もの触手に愛撫され、舐められ、犯されている。

なんて、なんて……………うつくしい光景だろう……………。

未来ある少年がすべてを奪われて穢されていく様は、俺の目にはどんな美女より宝石より絶景だった。
これだったのだ。彼だったのだ。俺を奮い立たせてくれるものは……………。

体験版はここまでです。
続きは製品版でお楽しみください。